

性が残存することを強調しなければならなかった彼が、これを除去する手段は外からの矯正以外にないと信ずるようになったためでもある。さらに彼は、キリスト教帝国の理念を抛棄したが、皇帝自身が信徒である以上、個人として教会を保護し統一する義務があると考えたためでもある。

以上が本書の所論の要綱であるが、その論拠は、*De civitate Dei*, *De Genesi ad litteram*, *De doctrina christiana*, *Contra Faustum* をはじめ膨大な原典により丹念に裏打ちされており、説得力をもっている。けれども世俗化の神学という現代的関心が余りに強く表面にすぎている、アウグスティヌスをその時代環境から理解しようとする配慮を覆ってしまっているという印象を受ける箇所も多い。また特に教会論について、秘蹟、教義、聖職の保管者としての面が殆んど究明されていない憾みがある。教会をアウグスティヌスが好んで *corpus Christi* と呼んだのは、その構成員の資質や社会的構成などによるのではなく、神秘的かつ秘蹟的な制度の故であると思われるからである。

Anne-Marie La Bonnardière: L'interprétation
augustinienne de magnum sacramentum de
Éphés. 5,32, dans *Recherches Augustiniennes*

vol. XII-1977, p. 3-p. 45

加 藤 武

1

ラ・ボナルディエールはパリの *École pratique des Hautes Études* 教授。三十年余りにわたって故マルー教授に師事した。その主要な研究は *Biblia Augustiniana* と「野心的」と名付けられる一連の労作として1960年以来次々に刊行され、すでに七冊に達する。

A. T. *Le Deutéronome*, 1967, 72 pages

A. T. *Livres historiques*, 1960, 172 pages

A. T. *Les douze Petits Prophètes*, 1964, 56 pages

A. T. *Le Livre de la Sagesse*, 1970, 368 pages

A. T. *Le Livre de Jérémie*, 1972, 104 pages

A. T. *Le Livre des Proverbes*, 1975, 236 pages

N. T. *Les épîtres aux Thessaloniciens, à Tite et à Philémon*, 1964, 56 pages

さらにアウグスチヌスの『詩篇講解』や『三位一体論』の年代決定に関する研究の若干の成果を *Recherches de Chronologie Augustinienne*, 1965, 190 pages にまとめた。*Biblia Augustiniana* をめぐる研究のいわば副産物としていづれもアウグスチヌスと聖書——アウグスチヌスの同時代とのかかわりを含めて——の関係に関する論文が、*Revue des Études Augustiniennes* (1957, III; 1967, XIII; 1977, XVII, 1-2; 1974, XX; 1976, XI, 1977, XII) や *Recherches Augustiniennes* (1966, IV; 1971, VII) その他 (J. Danielou: 献呈論文集 *EPEKTASIS*, 1972, p. 111-p. 120 など) に発表されている。

2

ここに紹介する論文はエペソ書 5, 31-32 をアウグスチヌスとその全生涯においていかに読んだか、とくに magnum sacramentum をどのように解釈したかをめぐる考察である。参考のために、エペソ書 5, 31-32 の口語訳を日本聖書協会訳によってかかしておく。

31 それゆえに人は父母を離れてその妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである。

32 この奥義は大きい。それはキリストと教会とをさしている。

ラ・ボナルディエールによれば、この章句の解釈について、今日コンセンサスを見いだすことはむずかしい。フランスの共通訳聖書 (*La Bible oecuménique*) の註や、ショーヴェの最近の論文 (Louis-Marie Chauvet, *Le mariage, un sacrement pas comme les autres*, dans *La Maison-Dieu*, n° 127, 3^e trimestre 1976, p. 64-105) は、結婚の中にキリストと教会との神秘的一致の象徴が見出されるとする。しかしモアングによれば、(Joseph Moingt, *Le mariage des chrétiens, Autonomie et mission*, dans *Recherches de science religieuse* 62, 1974, p. 81-116) それは、現実の結婚の事態と

一致しない。

「聖パウロはもはや結婚がキリストと教会の結合のしるしであるとはっていない」とモアンはいう。

アウグスチヌスはエペソ書 5, 31-32 についてどのような解釈を与えたのであろうか。この箇所について、およそ四十をこえる註解が残されている。389年にタガステに戻ってから 428年、エクラヌムのユリアヌスを論難する最後の書物まで、その跡を辿ることができる。ラ・ボナルディエールはこのテキストの引用を次の三つに分類する。

第1のグループの引用はもっとも数が多く創世記、士師記、とくに詩篇、ヨハネ伝の章句と関連する。25回の引用の中5回のみが5, 31の《*Propter hoc relinquet homo patrem et matrem et adhaerebit uxori suae*》を含んでいる。

第2のグループの引用は五つの説教に収められるが、いずれも5, 31^a を含まない。

第3のグループの引用は、マニ教徒、グノーシス主義者、ペラギウス主義者、ドナチストとの論争のコンテキストにおいてみられる。5, 31^a を含むのはマニ教徒を論駁する三つのテキストのみである。

以上のようにみると、アウグスチヌスにおいてとくに限定された章句の重要な部分は次のようになる。

《*Et erunt duo in carne una; sacramentum hoc magnum est: ego autem dico in Christo et in Ecclesia.*》

そしてこの章句の中の鍵は *sacramentum magnum* にあるとラ・ボナルディエールはみる。(p. 6)

ところで冒頭の *Et erunt duo in carne una* はパウロによる創世記 2, 24^e の引用である。マニ教徒は結婚の制度を神に帰する旧約聖書のテキストにつまずいた。(Contra Secundinum 21) すでにイタリーにおいてアウグスチヌスは聖書の霊的な解釈をアンブロシウスを通して学んだが、アフリカに帰ってから、その線に従って創世記註解 *De Genesi contra manichaeos* を著わした。その II, 2 (3) においていう。

「すべてこのテキストはしたがって、まず、史的な観点によって論ぜられるべきであり、さらに予言的な観点から論ぜられねばならない」。

そして創世記 2, 24 について II, 13, (19) で

「ここでわたくしは史的な意味をみとめなくてはならない……しかしこのすべては予言なのである……」。

とのべ、II, 24 (7) でもそのことを繰返していることに注意しなくてはならないとされる。ラ・ボナルディエールはこのようにして、「アウグスチヌス自身の方法にしたがって」(p. 8) この章句の意義を問う。すなわち、予言的な意義は何か。字義通りの意味は何か。magnum sacramentum とは何を指すのか。

3

ラ・ボナルディエールは第一章「予言的解釈」でさきに挙げた *De Genesi contra manichaeos* につづくものとして、*De Genesi ad litteram* I, 1, (1); *De Genesi ad litteram* VIII, 5 (10); *De Genesi ad litteram* IX, 19 (36); *Quaest. in Hept.* I, 80; *De nuptiis et concupiscentia* II, 4 (12) を挙げる。このすべてのテキストに共通して、アウグスチヌスはパウロの証言に基づいて *Erunt duo in carne una* がキリストと教会に関わる神秘を告げる予言を表わしている、とラ・ボナルディエールは言う。(p. 13)

「この神秘の内容は何であろうか。予言はいかにして実現されるのであろうか。すくなくとも、アウグスチヌスの教会論の四つのテーマが存在し、それに由って、エペソ書 5, 32 の *magnum sacramentum* の意味があきらかにされる」。(p. 13) という。

- A. 受肉のテーマ
- B. ケノーシスのテーマ
- C. アダムの夢と十字架におけるキリストの「夢」
- D. *Christus totus* のテーマ

まず、処女マリアの胎内において、み言葉と肉とが結合するという婚姻にかかわるテーマ。このテーマはアウグスチヌスの説教において詩篇 18, 6: *In sole posuit tabernaculum suum, et ipse, tamquam sponsus procedens de thalamo suo, exsultavit sicut gigas ad currendam viam* と結びつけられる。 *Sermones* 187, 4 (4); 192, 2 (2); 192, 3 (3); 194, 4 (4); 195, 3; 372, 1 (2)。そしてしばしばアウグスチヌスはこの *Ps.* 18, 6 と *Gen.* 2, 24^c を結び合わせている。このテーマは特にノエルの説教としてとりあげられ、典礼にかかわるものであった。ラ・ボナルディエールはティコニウス

の *regula prima* の影響をここに見ている。(p. 16, 及び同註41参看)

第二のケノーススのテーマはすでに *De Genesi contra manichaeos* II, 24 (37) にあらわれている。*Gen. 2, 24^{ab}* は史的事実としてはアダムに関していわれているが、そのことの予言的な意味は、父のみもとを離れたキリストに関していわれているとして、*Phil. 2, 7* と関連付けている。後期の著作においても同じ引用の仕方を見いだすことができる。*Contra Faustum* XII, 8; *Tractatus in Io. Ev.* 9, 10; *En. in Ps.* 44, 12 など。

第三のテーマはエヴァがアダムから出たように教会はキリストより出たものとするもので、アウグスチヌスはすでにやはり *De Genesi contra manichaeos* II, 24 (37) 以来このテーマに親しんでいるが、このテーマは教父の伝統に属する。この伝統的テーマを J. Danielou; *Sacramentum futuri, Études sur les origines de la Typologie biblique*, éd. Beauchesne, Paris 1950 は特にポアチエのヒラリウスについて分析した。

第四のテーマはキリストは教会の首、教会はキリストの肢体と使徒パウロが述べるもので、教会の初心者に向ってなされる教育の主題をなす。このテーマとエペソ書 5, 31^b-32 との関連は『詩篇講解』においてくりかえしあらわれる。詩篇の中で語っているのはキリストに他ならない。「誰が語るのか」、「誰の声を聴くのか」この連関でエペソ書 5, 31-32 が引かれ、13回を数え、*loqui* という語は50回になんなんとしている。キリストの名においてであれ、その肢体の名においてであれ、語るのはキリストである。実際キリストと教会はひとりの人 *unus homo* に他ならない。パウロはそれを *magnum sacramentum* と呼んだ。そしてこの主題 *una caro, una uox* は繰返される。ラ・ボナルディエールの分析はこの第四のテーマにおいてもっともくわしい。そしてここでもティコニウスの *regula prima* の影響をみようとする。p. 27-28, 及び註 78

この四箇の教会論的の主題に共通するものは何か。それはキリストと教会を結びつける神秘的音楽的な諧和、一致である。*sacramentum magnum* とはこの全面的一致の秘義を指す。

4

第二章「字義的解釈」においては結婚の意義が四つの角度から論ぜられる。

A エペソ書5, 32の *magnum sacramentum* は、個々の人間の結婚に適用されない。*De nuptiis et concupiscentia* I, 21, 23 においてアウグスチヌスは結婚の価値として、*proles, fides, sacramentum* をあげている。しかしそれは、*magnum sacramentum* とは呼ばれない。*Tractatus in Io. Ev.* 9, 10 においていう。

「この奥義は大きい。だがこの大いなる奥義が花嫁をもつ個々の人に見出されるなどと感達えることのないようにと使徒はつけ加えていうのである。わが言うところはキリストと教会においてなのである、と」。

B しかし結婚の制度は創造の始めから神がさだめたものである。マニ教徒の誤解に対してエペソ書5, 31-32 が用いられる。

C ラ・ボナルディエールは結婚 *coniugium* の三つの価値の三番目 *sacramentum con(n)ubii, sacramentum nuptiarum, sacramentum matrimonii* とアウグスチヌスが呼ぶもの、すなわち、解くことのできぬ関係 (*l'indissolubilité du lien*) を吟味する。この *sacramentum* の聖書的根拠は *Mat.* 19, 6^b; *I Cor.* 7. 10-11; *Ps.* 47, 2^b にある。この sacramentum は神の国の成員にとって意味をもっている。

D キリストと教会の一致、男女の婚姻による結合の間にどのような関係があるのだろうか、これまで辿られたところからそこには象徴の関係は存しない。(p. 41) 逆にキリストと教会の相互の愛は、結婚に対して模範とされる。

以上から結論される。*magnum sacramentum* と *minimum sacramentum* (結婚) とは価値の序列をかたちづくる。*magnum sacramentum* は *minimum sacramentum* にとって *exemplum* としてあおがれるべきである。

5

或る日、ラ・ボナルディエール女史はロダンの言葉を「フランスの聖堂」の中で見付ける。

「すこしずつ、ユニテへと入ってゆかれるだろう。関心のさまざまなつり合いの中から、方法はおのずからうまれてこよう。最初、一瞥したときにそれを分析するために君の視線がばらばらにする一つ一つの要素はやがて一つのものになり全体を構成するに到るだろう」。

ラ・ボナルディエールは *Le Livre de la Sagesse dans l'oeuvre de saint Augustin*, dans *Revue des Études Augustiniennes*, 1971, XVII, 1-2 でこの言葉を引きつつその方法論をのべている。

「アウグスチヌスがいかに聖書を知り、理解していたかをとらえようとするには、二つの道がひらかれている。その著作から年代を追ってはじめ、個々の著作と聖書との関係を学ぶこと。聖書の各書そのものからはじめ、その、アウグスチヌスの著作を経過しての遍歴 (l'aventure) を学ぶこと。」 p. 172

そして後者を彼女のライフ・ワークとしてえらんだという。ここに紹介したエペソ 5, 31-32 に関する研究もその道筋に沿ってなされたものである。それは一見職人的な仕事のようにみえる。しかしなんとという堅固なメチエであろう。彼女の裡にある幻をこの徹底的な分析の奥にひとは見ないであろうか。

William J. Hoye: *Actualitas Omnium Actuum.*
Man's Beatific Vision of God as Apprehended
by Thomas Aquinas

Verlag Anton Hain, 1975

稲垣良典

本書の著者は米国出身であるが、現在は西独のミュンスター大学に在職中である。評者は1974年ローマナポリで開催された国際トマス学会に出席したさい、たまたま宿舎で同じ部屋をふりあてられ、トマス研究、および当時筆者が参画していたクザーヌス全集校訂をめぐる種々の問題について話しあった記憶がある。

トマスの至福論についてはガリゲー・ラグランジュの註解、およびラミレスの詳細を極めた註解があり、また論争的著作も多く書かれているが、本書はファブロ、ジルソン、ド・フィナンスなどによって開拓された、トマス形而上学の中心である「エッセ」研究の成果を土台にしてトマスの至福直観の概念に光をあて、またこれ